

俺がリクったご当地グッズといらたか念珠をたずさえ東北から帰還した茶倉を待ち受けてたのは、フォルダに嵩んだ要返信のメールの山だった。

「うへえ」

「どんまい」

パソコンを立ち上げた上司の心底げんなりした第一声に同情し、ぼんと肩を叩く。

所長と助手が不在の間、やむなく休業していたTSSも本日よりめでたく再開。

「まずは掃除だな」

棚に飾った置物と蔵書の詰まった書架にハタキをかけ、床の隅々までモップで擦り、全部の窓とテーブルを雑巾で拭く。

「病み上がりで汗かいた」

雑巾の汚水をバケツに絞り、ぴかぴかに磨き上げたオフィスを見回す。綺麗になつて気持ちいい。

俺の掃除中、茶倉は椅子にふんぞり返つてメールフォルダを整理していた。

掃除用具入れにバケツとモップを片し、大の字でソファー

にダイブする。

「ご褒美に冷蔵庫のダツツ食っていい？」

「図に乗るな」

「ケチ」

「雪見大福なら可」

大きなあくびをこぼす。

「久しぶりに働いたから眠くなってきた」

「自分の布団で寝ろ」

「こっちのソファーのが寝心地いいんだよ」

「キノコ栽培しとる万年床と比べんな、三十万したんやぞ」

「最低月一で干してるぞ」

「毎日干せや」

「さすがに潔癖」

「クリーニング代払え」

「なんで？」

「ズボンが汚れた」

「そこまでじゃねえよ」

「気持ちの問題、精神的慰謝料つてやつちや」

「三十分だけ。な、お願い！」

両手を合わせ拝む。茶倉が肩を竦める。

「アラムかけとき」

「さすが所長、話がわかるウ」

上機嫌で指を弾き、腕枕を敷いて横たわる。寝入りばな、着信音で叩き起こされた。

俺のじゃねえ。

片目を薄く開けて様子を探りやパソコン作業中の茶倉が舌打ちし、ハンズフリーに切り替えたスマホを横に置く。

スピーカーボタンが押された直後、知らない若い男の声が響き渡った。

『もしもし練？』

「いちいち張り上げんでも聞こえとる」

『今いいか』

ちよつ待つ、いきなり呼び捨て？

「親父の容態は？」

『経過は順調。人間離れたスタミナに医者が驚いてる、退院予定日も前倒しになりそうだ』

「さよか」

ツンケンした声色が和らぐ。

「みどりはどないしとる」

『元氣だよ、勉強教えてる。学習意欲がすごくてまいっちゃうぜ』

「お前が家庭教師か。笑える」

みどりの名前には心当たりがある。茶倉が修行先で出会った、土地神に魅入られた女の子だ。

『それでさ、物は相談なんだが』

「断る」

『一応最後まで聞けよ』

「話してみ」

『みどりが東京観光したがってんだけど、今度ガイド頼めねえかな』

「聞いて損した」

『なんでだよ！』

「東京なんて空気汚いし人多いしでええ事ないで」

『スカイツリー見たいんだとき』